International MRA Association of Japan

IMAJ

NEWS NO.86

（社）国際MRA日本協会機関誌
発行年月日　1998年7月27日
発行所　（社）国際MRA日本協会
150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5
東光苑マンション802
TEL:03-5721-6861 FAX:03-5724-6880
E--mail:KYU05006@niftyserve.or.jp
発行人　柳澤　錬造
編集人　柏原　征則
頒　価　1部200円

JULY 1998

特集　◎「第21回MRA国際会議」レポート

価値観、意識、ライフスタイルの転換　そして実践へ

人と、地球の明日のために それぞれの役割に気づき、活かし合う

●仲良く歌を一緒に歌う台湾と中国からの参加者

21回目を迎えたMRA国際会議

去る6月6日(土)から7日(日)にかけて第21回MRA国際会議がアジアセンターODAWARAで開催されました。「人生の意義を求めて― それぞれの生き方、それぞれの役割」をテーマに開かれたこの会議には、海外からは台湾MRA協会のリュウ・レンジョウ夫妻、オウヤン・フェファンさんの3名がゲストとして招かれました。またミャンマーからは、今回日本でのビジネスの合い間をぬって自主参加する方もいました。国内からは、教育関係者、会社員、学生、主婦、NGO関係者、そしてアジア各国からの留・就学生を初めとした在日の外国人の方々もこの会議に参加し、延べ70名が全体会議や各分科会を通して積極的に意見交換、討議を行いました。

開会式の冒頭では柳澤錬造国際MRA日本協会会長代行が、去る3月14日に死去された故住友義輝会長のご冥福を祈り、参加者の賛同を得て黙とうを捧げた後、「今日の情勢の中で、自分の為ではなく人の為に何をするか、何ができるか。どんな小さなことであっても一人ひとりが決心をして、そこへ向けて出発する機会であって欲しい」と参加者に呼び掛けました。引き続いて地元小田原の二宮秀夫氏は、物質主義が生んだ混乱が、紛争、腐敗、環境問題の3つに現れていると指摘した上で、「その原因は、恐れ、憎しみ、貪欲、利己主義という人間性にある。この会議ではいわゆる提言をまとめたり宣言を発表したりするものではなく、地球環境問題を初めとする現在の地球上の問題に関して、実は我々一人ひとりは被害者ではなく加害者であるということに気づく会議である」と語りました。

すべてをつなぐライフライン

全国的に環境問題について啓蒙活動を続けているネットワーク『地球村』の立山裕二講師から「私たちのライフスタ

■主な内容■

◆第21回MRA国際会議開催・1-3P
・分科会～環境・教育・国際化の問題を意見交換
◆第13回コー円卓会議・4-5P
◆シリーズ視点「国際民族紛争」
◆環境問題・6P
・「地球温暖化」防止対策：個人編
◆MRAワールドニュース・7P
・MRA60周年記念会議（韓国／日本）
・今後の来日予定者（8月～10月）
◆事務局通信・8P

●立山裕二氏

95年4月にココロジー経営研究所を設立、代表を務める。1992年より一年間、総合法令会員情報紙「スーパービジネスマン」に環境問題及び情報化について執筆したのを初め、地球環境ネットワーク"地球村"理事として講演及び執筆活動に活躍中。

イルと環境問題」のテーマで、心とエコロジー（生態学）の観点から、ライフスタイルをメインに環境問題の本質についてお話を伺いました。

その中で立山講師は、3年前の阪神・淡路大震災でのご自身の体験から、当時マスコミで賑わされた"ライフライン"という言葉が本来持つ意味を、次のように強調しました。「"ライフライン"というのは、人と人とのつながり、人と自然とのつながり、自然同士のつながり、全てのつながりが生命線・ライフラインであるはずです」そして、「現在私たちが直面している様々な問題、環境の問題、いじめの問題、老人福祉の問題、差別の問題など、実は『命』という部分で全て根底で一つにつながっていて、その部分に目を向けると、やはり今、根底のライフラインが切れていることが、ほとんどの大きな問題の根底にあるのではないか。そういう意味で環境問題というのは、その一つの側面に過ぎません。ですから、もう一度この命のつながり、ライフラインというものを、家族、学校、職場で問い直し、思いだすことが環境の勉強のスタートだということになります」と参加者に強く呼び掛けました。

環境、教育、国際化の問題を意見交換

講演会の後『環境』・『教育』・『国際』と3つの分科会が設けられましたが、どれも今、重要性を増しているテーマだけに出席者全員が活発な議論を展開しました。

「私たちのライフスタイルと環境問題」のテーマで行われた『環境』の分科会では、立山講師も加わり講演会の内容をベースに、それぞれが環境問題に対する関心や普段の日常生活の中でどのように取り組んでいるかを話し合いました。またそれぞれ新しい観点から環境問題に対する問題意識や情報等が出され、参加者同士でさらに問題点への認識を深め合いました。既に多くの参加者が、それぞれ身近で出来ることを実践していて、この問題に対する参加者の関心の高さが伺えました。

『教育』の分科会では、「大人の在り方が子どもの在り方－今、私たちの何を変えるべきか」のテーマで、まず子どもたちが、今どのような状況にあるのかを認識することから話がスタートしました。

この分科会には、老若男女、80歳から20歳まで幅広い参加がありました。「教育勅語にあるような教育が望ましい」という一つの意見も出ましたが、全体として、今は時代が変わってきていることから、過去が良いとか今が良くないとかではなく、これからお互いがどのように学び合っていけるかを考えることが重要であるという認識が多くを占めました。また、子は親の鏡であるということから、大人の在り方に議論の目が向けられ、特に子育てにおける母親の重要性などが複数の参加者から指摘されました。

「共生から共働へ－在日外国人との交流の在り方を考える」をテーマに行われた『国際』の分科会では、日本で暮らす外国籍の方々がこれまでの日本での生活で感じてきたことや、日本・日本人に望むことなどをそれぞれの視点から素直に発言いただきました。その中で特に「日

分科会

この会議では3つの分科会に分かれて、環境、教育、国際化の問題について意見交換を重ねましたが、その中から参加者からの発言をいくつかまとめてご紹介します。（尚、参加者からの発言は全て要約しています）

●分科会（国際）で熱心に意見交換を行う様子。

環境

▼主婦の立場から

割り箸を最後まで使い切る／油をきちんと拭き取る
買い物の際は買い物袋を持参する等身近なところから実践

▼食材と健康という観点から

◎「普段の食事に【有機野菜】を取り入れている。有機野菜は他の野菜と比べると確かに値段は高いが、将来の自分の健康を考えれば決して高くはないのではないか」

◎「娘の食生活の乱れに気づいたことから、家族で【健康】の問題を通して環境問題に取り組み始めている」

▼水という観点から

◎「国連の報告によると21世紀は水を争う世紀になるといわれ現在、核を保有している国々のほとんどが、近い将来【水不足】が間違いないといわれている。石油でさえそれを争い戦争につながり、ましてや水は【命】に関わる問題である」

▼行政に対して

◎「回収されたペットボトルが、最終的に私たちの意識とは違った処理の仕方が行われている」→投書を行い情報開示を求める

◎「放置自転車の問題など、諦めずに何度も役所に足を運ぶことによって問題解決の道が開ける」

◎「行政にはしつこいといわれるまで言い続ける」

本人がもつ『曖昧さ』に戸惑い、どのように行動したらよいのか分からない」といった意見がでました。

これに対してある日本人参加者は、「日本人同士また外国人に対して、しばしば曖昧な態度をとってしまうが、その曖昧さは何処から来るのか考えてみると、その物事についてあまり深く考えていないこと、注意力がないこと、無関心・無責任であることに行き当たる。注意力をもって考えることは思いやりにつながる」と語りました。こうした意見を踏まえて、国際化時代の日本人と日本社会の在り方について意見交換が続けられました。

夕食の後開かれた全体会議では、台湾のリュウ・レンジョウ夫妻、難民を助ける会の相馬雪香会長、(財)国際交流基金の滝田実顧門の４名から、メインテーマに沿って自身の体験から得た人生の意義についてお話を伺い、第一日目のプログラムが終了しましたが、その後夜遅くまで参加者同士で語り合う姿が数多く見られました。

一夜明けた７日の午前中は第２回目の分科会が行われ、前日に引き続き熱心な議論が交わされました。そして午後からは全体会議・閉会式が開かれ、各分科会の代表者から２日間の話し合いの内容がまとめて報告されました。また、各分科会の参加者からも発言がなされました。

気づきとそれぞれの個性、役割

小学校5年生の時、ご自身のある気づきから環境問題に取り組むことになった立山裕二講師は、その後も得た様々な“気づき”の中から次のようなお話をされました。

「4年前父がアルツハイマーという病気になりました。暴れる、幻覚、幻聴、もう大変で少しでも目を離すとドアを突き破り外に走っていこうとします。ある日父親が大暴れをし、必死になってそれを止めていました。その瞬間“アッ”という感じで.....それは言葉にだすと色あせてしまうのですが、あえていうと父親が暴れているのではなく、家族の不安、恐怖、心配を鏡にして返ってきたということに気づいたんです。

‘父親が暴れているのではなく私たちの心が荒れていた’。今でも父親が暴れますが、その時は決まっているんです。‘私が母親に対する愛情を忘れた時なんです’。父親はそこまでして私を教育してくれている。人から見たら病気、人から見たらちょっとヘン。でも個性、役割を持っている。その違いというものを認め合って、活かし合って、愛とか感謝を通じて一体化していく。違いというのは違いを別けるのではなく分かち合うため。別けるのではなく融合したら本当に今一番大事な人間としての智恵、叡智というのが生まれてくるのではないかと思います」

また別の参加者は、「日頃、大学などで、教授たちが自分たち若い者の意見には余り耳を傾けてくれないと感じていたが、ここでは自分の話を年配の人も聞いてくれると感じた。いろいろな視点からの意見を聞くことが大切だと思う」と語りました。

そして、最後にスリランカ出身のカピラ・ゴダクムブラさんは、「今日この会議に参加された皆さんが、この会議を通して学び決意したことを、次の会議でその成果を報告し合えるようにお互いに頑張りましょう」と述べ、来年の再会を約し、会議の幕が閉じられました。

教育

▼親の立場から

◎「私は妻として、夫や子どものいうことに愛情を持って耳を傾け、彼等が本当に何を欲しているのか、また私に何をして欲しいのかを知るようにしました。そして、教育については夫に決めさせるようにしました。人生には大きな目標を持つことが必要であり、かつ、世界で人の為になるようなことが出来る人間に成長するよう、夫から子どもたちに話をしてもらいました。家庭の中では誰かを指差して非難しないことです」

◎「**【子は親を見て育つ（父母の在り方を見て）】**というが、今の子どもたちは現在の大人の在り方=倫理の欠如した世界を見ている。過去のいい処を残しながら、将来に反映していけばいい」

▼教育関係者の立場から

◎「**【学歴社会の弊害】**を母親たちに理解してもらうことがとても難しい。また子どもの本心とは逆に**【塾】**へ通い、何事も競争社会の中にいる子どもたちに、思いやりを持てと言っても持てない状況にある。そしてゆとりのなさからも、子どもたちは自分の力で自分独自のことが考えられないでいる。まず我々大人たちが考えを変えていくことが必要ではないだろうか」

国際

▼日本人参加者から

◎「以前イギリスを訪れた時、イギリス人の友人に、町を歩くあるアジア系の人を何人と思うかと尋ねたことがある。その友人は『彼はイギリスで生まれたイギリス人だと思う』と答えた。そのような考え方が出来るのを見て、国際化が社会の一部として浸透している欧米諸国と日本の違いをこの時強く感じた。日本も国際化を社会の一部として受け止め、視点を変えて前に進むことが大切だと思う」

◎「日本に長く住んで日本が嫌いになって帰って行く人や疏外感を持つ人がいると聞いて胸が痛む。自分自身が変わらなければならないと感じた」

▼外国籍の参加者から

◎「日本の若者は過去の戦争についてあまり知らない為、他のアジアの国の若者が歴史を語る時、感情的になるのが理解出来なかったようだ。中国人の間では戦争の記憶は今も強く残っている。スイスのコーの会議では、カンボジア人が中国を恨んでいることを知った。過去を知る勇気を持つことは、これからの信念・基盤を持つことにつながる」

◆— CAUX Round Table Conference

第13回 コー円卓会議

（7月19日～22日）

コー円卓会議は、毎年8月（昨年は7月）にスイスのジュネーブ近郊にあるコーという小さな町のMRA会議場で開催されます。

毎年40名近くの世界の経済人が集い、自由な討議を展開しますが、ここ数年の主なテーマは、『グローバル企業が世界で果たすべき役割・責任は何か』に絞られており、より具体的には『企業行動や企業倫理』の問題が中心となっています。

コー円卓会議も１９８６年の第１回目から数えて今年で第１３回目を迎え、ある意味でちょうど転換期を迎えていると言ってもいいでしょう。その意味で、今回討議される議題も若干従来と異なった内容も織り込まれていますが、その伏線は一昨年の会議以降既にあったようです。では、どういう意味で『転換期』なのでしょうか。そこには、以下のような背景が存在していると思います：

①コー円卓会議が、以前の議論中心のサロン的色彩の強いやや閉鎖的な集団から、もっと行動的な、オープンな組織を志向するように傾いて来たこと

②現実に、各国のメンバーや事務局組織をもっと充実させようとする動きや、外部の国際機関（国連、OECD、ILO等）や諸団体（経団連、関経連、経営倫理学会や監査役協会）と接触・協業する機会が増大していること

さて、今年の会議ではどんな成果が期待出来るでしょうか。一つのヒントとして、コー円卓会議のワレン議長が今年の円卓会議参加候補者に出した招待状の骨子をご紹介してみましょう：

****

新旧CEOや上級役員の方々の集いであるコー円卓会議は、個々の企業ベースまたは政府、その他の機関との協業を通じて、より良い世界の構築に向かって企業に働きかけを行なう中心的な立場に立っています。

コー円卓会議が策定した『企業の行動指針』は、『グローバル社会に於ける企業の重要な役割』と題したポジション・ペーパーと共に、グローバル企業の企業行動に関する世界標準となっているのです。

コー円卓会議では、その行動計画の一環として、また、会議参加対象者を発展途上国の企業経営者にまで拡大しようという計画に沿って、信頼性・透明性、貧富の差（雇用）、環境の各問題に草の根レベルで取り組むため、国単位に支部（national chapter）を設立することを検討しています。

会議の全体テーマは、『グローバル経済に於ける企業の

シリーズ「視点」③

【国際・民族紛争】

去る６月小田原で開催された第２１回MRA国際会議で環境問題について講演された立山裕二さんは、「現在私達が直面している様々な問題、環境・いじめ・老人福祉・差別などは、実は『命』という部分で根底でひとつにつながっている」と述べられましたが、その意味では国際紛争や民族紛争も全く同根の問題と言って良いでしょう。

さて、今年は現時点で言えばまだ半分が経過したに過ぎませんが、今年ほど国際紛争事件が数多く新聞等に報道された年はないのではないかと思います。

昔から未解決のまま残されているものから、比較的最近発生したものと、背景や規模も夫々異なりますが、紛争の犠牲者はいつも一般市民や弱者の立場にある人々という事実を見る時、新聞報道等に接する度に胸が痛みます。本年年初から現在までに報道された紛争事件を見てみましょう。**主なものだけでもこんなに有るのに驚かされます（ほぼ解決したものも含む）：**

- **北アイルランド紛争和平合意**
- **エチオピア／エリトリア紛争**
- **インド／パキスタン紛争（カシミール問題）**
- **コソボ（ユーゴ）独立紛争**
- **チベット独立問題**
- **東チモール（インドネシア）問題**
- **バスク（スペイン）独立問題**
- **ルワンダ内戦（大量虐殺）**

↗

リーダーシップについて－企業の責任と課題』となっており、会議には、国連、世銀、OECD、ILOの代表も参加する予定ですが、更に、日米欧の枠組みを越えた拡大を目指すコー円卓会議の方針に沿って、オーストラリア、カナダ、メキシコ、タイ、シンガポールや中東地域からの参加も見込んでいます。

ぜひ今回の会議にご出席願い、企業リーダーシップに必要な原則の明確化、優先課題の決定、国支部の屋台骨を支える主要ビジネス・リーダーの選定、世界に向けて有意義な成果をもたらすために必要な戦略的協業の推進にお力添え戴きたいと存じます.....

****

尚、円卓会議そのものとは直接関係はありませんが、コー円卓会議関連の昨今の動きとして注目したいことは、

①外部の関係団体との接触・協業の機会が確実に増えており、最近の例では上記以外には「日本コーポレートガバナンスフォーラム」「日本能率協会」との接点が出来たこと

②今年になってから特に大企業を中心に「企業行動規範」などの社内ルールを制定しようとする企業が増えてきているが、そんな動きと連動するかのように、コー円卓会議が１９９４年に策定した『企業の行動指針』を「世界標準」の手本として参考にしたいという企業が目立って増えていること。

上記は、コー円卓会議の今までの活動の成果が出たものと思われます。

豆知識

コー円卓会議ポジション・ペーパー

『コー円卓会議へのご招待』で紹介されているワレン議長の『招待状』に出てくるポジション・ペーパーとは、コー円卓会議のいわば憲法のようなもので、コー円卓会議の立場を以下の３点に纏めて明確にしています：

①コー円卓会議の基本的考え方と機能・役割
②グローバル社会に於ける企業の役割
③コー円卓会議並びにその参加メンバーが取り組むべき重点課題（問題点）

特に特徴的なことは、最近までは日米欧三地域からの参加者主体の集まりだったが、今後はアジア、南米等の企業も含めた世界的規模の組織に拡大して行くことを明確に詠い、更に、重点課題として以下の３点を取り上げたことでしょう；

1.雇用の確保　（富める国と貧しい国の較差と雇用ジレンマの解決）
2.企業経営の信頼性と透明性
3.環境問題

但し、日米欧並びにアジア、中南米は夫々社会経済的、文化的背景が異なるため、各地域は夫々の置かれた立場・環境に応じて各課題の優先順位や解決手順を定めて行くことにしています。

●その他、クルド（イラク）問題、アボリジニー問題等々

残念ながら私たちはこれに対して個人としては何も出来ません。しかし、少なくともこのようにしてはどうでしょうか：

＊先ず、日本では想像もつかない悲惨な紛争事件が世界では常に起こっているということを理解した上で、それなどの新聞報道に出来るだけ敏感になること

＊「Think globally and act locally」の態度をいつも忘れず、紛争解決に個人として少しでも貢献できるような機会が有ったら、出来るだけそれに参画すること

さて、去る４月１４日（火）の日本の新聞各紙は「北アイルランド紛争和平合意」のニュースを大きく報道、後に主要各国首脳も、その和平合意へのプロセス、合意内容について大きな賛辞を送ったものでした。何故でしょうか。

この合意には、北アイルランドのプロテスタント、カトリック両勢力、英国、アイルランド両政府など紛争当事者が全て合意に参画、米国も仲介役として関与した訳ですが、最終的に和平合意のカギとなったのは、当事者が少しづつ譲歩し合うことによって相互に「共生」の枠組みを作って行こうとした熱意でした。世界はこの真摯な取り組みに賛辞を送ったのです。

「共生」という言葉。これは本来生物で学んだ言葉ですが、コー円卓会議でキヤノン賀来会長（当時）が提唱されたように、環境問題も含め、様々な意味でグローバリゼーションが進展している現代社会で、人々が生き続けて行くための、大切な考え方であると言えるでしょう。

環境問題

地球温暖化、環境ホルモン、ダイオキシン汚染問題など環境問題については弊協会でも重点テーマとして様々な取り組みを行なっています。去る6月小田原で開催された第21回MRA国際会議でも活発な意見交換が行なわれましたが、この環境問題が私達の日常生活の範囲内で抱える問題点、ヒトを含む生物または生態系に与える影響については既に充分議論されてきたと言って差し支えないでしょう。それでは私達はこれからはどうすべきでしょうか。あとは行動あるのみですが、ここでは、一人の社会人として不言（有言）実行を確かなものとするための方法を考えてみましょう。MRA国際会議でも出された意見を含めて整理してみると：

1. 心構えとして：

▼環境問題は他人事でなく、一人ひとりが危機感を持たなくてはならない問題と理解する

▼問題を解決しようという心構えが最も大切

2. 環境問題の捉え方：

▼自分の仕事や生活体験、社会経験によって環境問題を捉える切り口は随分違ってきて当然だと思いますが、その方が環境問題を「自分の問題」として 捉え易くなるはずです。

例えば、環境問題を：

- 自分や子供の健康増進
- 動物や森林保護
- 自動車の燃費削減（燃料効率向上）
- 電気代節約
- 在宅勤務で効率向上
- 極端な異常気象（異常干ばつ・寒さ・降雨等）・食糧不足・感染症流行予防

などの観点から考え、対策を講じてみるのはどうでしょうか。

3. 習慣づけ：

▼自分で決めたルールを自分の生活習慣の中に自然に溶け込ませる努力が必要

▼そのルールが自分の生活の中に定着するまで、意識的に行動する

さて、前々回から取り上げている「地球温暖化」防止対策問題。執念深いようですが、前回「個人」で出来ることとして挙げた対策を含め、もう一度私たちが日常生活で出来得ることを考えて見ましょう：

「地球温暖化」防止対策：個人編

▽大量生産、大量消費、大量廃棄の考え方を改め、生活様式を省エネスタイルに転換することが最重要

▽個人としては乗用車が最大の温室効果ガス発生源。そうすると、

- ☞ 出来るだけ車に乗らないで歩くようにする。乗るなら低公害車。移動には公共交通機関を優先利用。
- ☞ 路面電車の二酸化炭素排出量は、乗用車の1／5に過ぎない。出来れば路面電車を利用してみる。
- ☞ エンジンのアイドリングを毎日5分間止める➡二酸化炭素の自動車からの排出量の2％強が削減可
- ☞ レジャーや都市交通システムの中に自転車を位置づける

▽省エネ性の優れた家電製品、紙類などの選別使用に気を付ける

▽待機電力の節減、照明器具はこまめに消す。朝シャンを控える、など

▽コピー機等の事務機は昼休みには電源を切るようにする

▽昼食弁当用には自宅から箸を持参するようにする － 割り箸は出来るだけ使わないように心掛ける（新聞報道によると、毎日5,500万組、900本の木が割り箸用に使用されている）

これなどの対策は各々すべて、左記『環境問題の捉え方』で考えた項目のいずれかに該当します。楽しみながら幾つかでも実行し、続けてみてはいかがでしょうか。継続は力。健康が戻って来そうな気がしませんか！

和解と許しの呼びかけ

先般の天皇・皇后両陛下のご訪英に際してはイギリスの数名の元軍人たちが沿道で背を向ける仕草をとるなど、まだまだ戦争の傷跡の深いことが改めて示されました。

そんな中、元軍人として参戦した二人のMRA関係者がテレビのインタビューで和解と許しの必要性をアピールしてくれました。MRAの専従として活躍されてこられたディック・チャナー元陸軍大尉は、天皇陛下が無名戦士の墓前に花輪を捧げられたウエストミンスター寺院の外で日本の国旗を振っている彼の姿が映し出された後、「戦後50年を経て、新しい"始まり"が必要です。これからのことを考えていくべきです。」と話しました。又、戦時中、捕虜として、有名なタイの鉄道建設に従事したレス・デニソン氏は、「日本人はこれまで哀悼の表明に努めてきている。自分は83才になるが、なぜこのような年になるまで憎しみの心を解き放てないのだろうか。友情の手を差し伸べるべきではないだろうか。」と述べ、既に在郷軍人が英国政府から傷痍年金を受けているということを踏まえ、日本から補償を求めている強制労働収容所生存者協会の行動にも疑問を投げかけました。

韓国でMRA発足60周年記念集会を開催

去る6月3日、ソウルでMRA発足60周年を記念する朝食会が、『自分が変わってこそ経済も改善し、国も発展する』というテーマの下に開催され、教育関係者を中心に130名余が参加しました。姜 錫圭韓国MRA会長（湖西大学総長）の「IMFの危機は我々の社会の道徳的弛緩から始まったものであり、政府、企業そして学者たちが自己利益のために道徳をないがしろにしたためである。今こそ、全社会的な道徳運動が必要な時である。」との挨拶に続き、文化観光大臣の祝辞、そして、李 栄徳元首相による「国民性改造とMRA運動」というテーマでの講演等が行われました。台湾からのゲスト3名を代表して劉仁州台湾MRA協会理事長が、又、日本からも事務局の長野がそれぞれMRAから学んだことを披露する機会を与えられました。日本を初め、各国のMRAから祝辞が寄せられたことも報告されました。

日本でもMRA発足60周年記念集会を開催予定

1938年にロンドンでMRAが発足して以来、本年で60周年を迎えるのを記念して、来る10月25日（日）の午後1時15分より4時40分まで、日本青年館・中ホールにて記念集会を開催します。各界代表によるパネル・ディスカッション等を通し、日本と世界の諸問題の解決のために、今、私たち一人ひとりが何をすべきなのか、又、何ができるのかを探る機会としたいと存じますので、奮ってご参加下さいますようお願いいたします。詳しくは、追って皆様にお送りする案内状をご参照下さい。

★1998年度の主な活動予定(国内・国外)

7 Apr	オーストラリア	青年訓練コース	7月 3日～12日
	スイス	コー円卓会議	7月19日～22日
8 May	台 湾	アジア青年会議	7月31日～8月 6日
	スイス	コー世界大会	7月11日～8月23日
9 Sep	イギリス	FFFインターナショナルコース	9月 3日～22日
10 Oct	日 本	第21回関西MRA秋季大会	10月 17日～18日
		MRA発足60周年記念集会	10月25日

★海外ゲスト

【4月～6月】

リン・フーイェ氏（台湾）
リュウ・レンジョウ氏（台湾MRA理事長）
グレース・リュウ夫人（台湾MRA理事）
オウヤン・フェイファンさん（台湾MRA秘書長）

※今後の来日予定者

【8月～10月】

ジョティー・スブラマニヤンさん（インド）
ヴェロニカ・クレイグさん（イギリス）
クレア・レゲットさん（ニュージーランド）
チョン・ヨン・ヌク夫妻（韓国）

スタディーコース参加体験記

浅見　昌代

私がこのコースを通じて学んだことは、2つあります。それはオーストラリアの先住民の問題と自分自身についてです。

フィールドワークで、アボリジニ（オーストラリア先住民）の問題に取り組んでいる人々に出会いました。私はこの人達との交流を通し、日本でもアイヌや被差別部落といった人種差別の問題があることを思い出し、自分がこれらの問題についていかに無知であるかということを思い知らされました。

ある日コース参加者の1人が私にこう言いました。「自分はこの国(オーストラリア)が好きだから、この国をもっと好きになりたいし、誇りにも思いたいからこの問題に取り組んでいきたい」。私は、この人やアボリジニの問題に取り組んでいる人たちの熱意や情熱に打たれ、私自身も日本の人種差別の問題についてしっかり学び直そうと決心しました。私はその影響を受けた参加者のひとりとある約束をしました。それは、これから私が書籍等で調べるアイヌ民族の歴史と現在進行しているアボリジニの問題をE-MAIL等を使って情報交換していこうと・・・。今はアイヌに関する本を読み始めています。

私はこのコースに参加する前に、約5年勤めていた会社を辞めました。会社を辞職した理由は、このコースへの参加が直接の理由ではありません。3年ほど前から興味を抱いていた福祉(正確には、ソーシャルワーク)の分野で、今後自分を活かしたいと決めたからです。では何故このコースに参加することと今後の選択が結びついたかというと、このコースでは自分とは違った背景(生活様式や文化、信条など)をもった人達に大勢出会えます。彼らとの共同生活を通して、日常生活の中では発見しにくい潜在意識の中にある「自分」(自分の弱さや強さ、プラス面・マイナス面、新たな可能性など)に出会うことで、「素顔の自分」を知ることが出来ればと、考えたからです。共通語が英語で、日本人の参加者は私1人だけでしたので、正直、躊躇することはありましたが、自分を鍛えると言う意味では良い経験になりました。

★スタディコース

オーストラリア、メルボルンのMRAアジア・大平洋センター「アーマ」とインド、パンチガニーのMRAセンター、「アジアプラトー」を会場（1年毎に交代）に世界中の青年を対象に行われています。コースでは時事問題、各国の歴史や文化、環境問題等、様々な講議やセミナーを受講したり、国籍や人種の異なる人々と寝食を共にし、「世界家族」の一員としての心構えや、今後の生き方の指針を学びます。フィールドワーク（野外実習）では、参加者たちはオーストラリアやインド各地を訪ね、様々な人たちと交流し、社会問題の解決に取り組む人たちへの理解を深め、コースで学んだことを実社会の場で実践するヒントを得ます。日本からもこれまで多くの若者が参加し帰国後はそれぞれの分野でコースで学んだことを実践しています。第25回スタディーコースは来年1月8日から2月15日までインドで行われる予定です。詳しくは事務局までお気軽にお問い合わせ下さい。

入会のご案内

㈳国際MRA日本協会では、家庭と社会の健全な発展と世界平和の実現に貢献する活動を行っています。その事業の充実、発展を図るため下記の会員制度を設け、より多くの方々のご加入を呼び掛けています。

■会員の皆様には

① 内外のMRA国際会議やセミナーなどに参加して国内外の方々と交流できる機会の提供
② 機関誌IMAJニュース等（年4回）の送付
③ 講演会／例会等のご案内
を行っています。

■入会申し込み方法

所定の入会申込用紙に必要事項をご記入の上、会費をお振込下さい。
郵便振替口座
口座番号　00180-0-38289
口座名　　社団法人　国際MRA日本協会

	個人年額	法人年額
正会員	6,000円	50,000円
賛助会員	3,000円～	50,000円～

※詳しくは事務局までお問い合わせ下さい。

会員数

平成10年7月15日現在

①個人・正会員
現在会員数　397名

②個人賛助会員
現在会員数　133名

③法人会員
現在会員数　12社

④法人賛助会員
現在会員数　73社

■事務局だより

◆次回のIMAJニュースは、現在スイスで開催されているコー世界大会の内容を中心に、10月初旬頃にお届けする予定です。
◆転居先不明で返送されてくる郵便物がございます。住所変更・訂正等ありましたらお手数ですが事務局迄ご連絡下さい。
◆これから夏も本番を迎え、暑さも厳しさを増してきますが、皆様におかれましてはいっそうご自愛くださいますようお祈り申し上げます。（事務局一同）

お詫びと訂正

前号の「1998年度の主な活動予定」の中で以下の誤りがありました。
①コー円卓会議7月9日～22日→7月19日～22日
②チェコスロバキア　→　チェコ
お詫びの上訂正させていただきます。